

国際交流事後活動ニュース

MACROCOSM

マクロコズム



2006.11 VOL.73

Contents

- | | |
|---------------------------------|----|
| 平成19年度内閣府青年国際交流事業
参加青年募集 | 2 |
| 国際青年交流会議 | 4 |
| 国際青年育成交流事業
(討議セッション・地方プログラム) | 8 |
| ターニングポイント | 13 |
| 青少年国際交流を考える集い
(ブロック大会) | 16 |
| 第三回日韓交流連絡会議 | 18 |
| 「青年の船」同窓会報告 | 19 |

(財) 青少年国際交流推進センター

平成19年度内閣府青年国際交流事業参加青年募集 事業既参加者の力で応募者数を倍増へ!

内閣府では、平成19年度事業広報について、例年より3カ月以上早い取り組みを始めています。既に内閣府ホームページがリニューアルされ、9月に帰国したばかりの青年の体験記などが掲載されました。また、来年度の基本的事業概要も掲載されており、これにより、青年が事業への参加を計画しやすくなりました。さらに今後は、各所で事業説明会が行われる予定です。

そこで事業既参加者である皆さんにお願いです。応募者で最も多いのは、既参加者から紹介を受けた青年です。この機会を捉えて、事業によって得た貴重な経験と大きな感動を、そして内閣府青年国際交流事業の素晴らしさを、もう一度周りの人に、そして広く社会に伝えましょう!

なお、事業の詳細は、来年の1月に発表される予定です。

<http://www.cao.go.jp/koryu/>



説明会日程

日 時	会 場
11月18日(土) 14:00~16:00 (13:30~受付)	立命館大学大阪オフィス 〒541-0041 大阪市中央区北浜3-1-18島ビル6F TEL.06-6201-3610 FAX.06-6201-3620 京阪・地下鉄御堂筋線 淀屋橋駅下車 京阪14-B出口エスカレーター上すぐ http://www.ritsumei.ac.jp/mng/al/
11月22日(水) 19:30~21:00	国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟101 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3番1号 TEL 03-3467-7201 (代表) http://nyc.niye.go.jp/facilities/d7.html

内閣府青年国際交流事業概要

国際青年育成交流

世界各国・地域に航空機で派遣され、訪問国において、現地青年との交流・意見交換、国際協力活動の現場の視察・体験、日本青年代表としての表敬訪問、ホームステイなどを行います。

(参考)平成18年度派遣先:

バルト三国、カンボジア、ドミニカ共和国、
ミャンマー、チュニジア

日本・中国青年親善交流

航空機で中国に派遣され、中国青年との交流・意見交換、社会状況等理解のための各種施設の訪問、日本青年代表としての表敬訪問、ホームステイなどを行います。

日本・韓国青年親善交流

航空機で韓国に派遣され、韓国青年との交流・意見交換、社会状況等理解のための各種施設の訪問、日本青年代表としての表敬訪問、ホームステイなどを行います。

世界青年の船

日本青年約120名と外国青年約140名が、船内で共同生活をしながら、3か国程度を訪問します。事業では、国際社会で通用する考え方やコミュニケーション能力を身に付けることを目的としたディスカッションや、社会活動を行う上で必要な団体・事業運営能力の向上を図るための国籍混交のグループによる共同自主活動やクラブ活動、国際社会の多様性や異文化に対する理解の促進を図ることを目的とした各国文化紹介などを行います。

東南アジア青年の船

日本青年約40名とASEAN10か国の青年約300名が、船内で共同生活をしながら、ASEAN加盟国のうち5か国程度と日本を訪問します。船内では、ディスカッション、共同自主活動やクラブ活動、各国文化紹介を中心とした活動を行い、訪問したASEAN各国と日本においては地元青年との交流や課題別視察、そして全ての国で2泊3日のホームステイを行います。

事業内容／応募資格

※訪問国及び日程は諸事情により変更になることがあります。最新の情報はホームページで確認してください。

	航空機による青年海外派遣			世界青年の船	東南アジア青年の船
	国際青年育成交流	日本・中国青年親善交流	日本・韓国青年親善交流		
実施時期 (期間)	平成19年9月 20日間程度	平成19年9月 20日間程度 15日間程度		平成20年1月～3月 45日間程度	平成19年10月～12月 50日間程度
募集人員	60名程度(5つの国・地域ごとに12名程度)	一般団員:中国 25名程度 韓国 25名程度 渉外団員(※):各2名程度 ※通訳業務も行う団員		120名程度	40名程度
応募資格	○日本国籍を有する18歳から30歳までの青年(平成19年4月1日時点)(日中・日韓交流の渉外団員は、概ね25歳から35歳) ○国際的な交流を通じて、地域、職場、学校、青少年団体、国際協力の現場など、将来自分が活躍するフィールドで役立つものを掴みとろうという積極的で前向きな気持ちを持っていることが一番重要です。 ○そのほか、日本青年の代表として我が国を紹介するための一般的な教養や訪問国における活動を円滑に行う英語力(英検2級程度以上)(日中・日韓交流を除く)などが求められます。				
研修	○事前、出発前、帰国後にそれぞれ研修を都内で行います。				
個人負担額	○事業ごとに国内研修にかかる経費等の個人負担額が設定されています。				
応募先	○各都道府県の青少年対策主管課(室)及び全国的な組織を持つ青少年団体				
選考の流れ	○中間選考(都道府県又は青少年団体が実施) 3月末～4月中旬(都道府県、青少年団体により試験の実施方法、内容が異なる) ○第2次選考(内閣府が実施) 5月 ※人物面接、一般教養、英会話(日中・日韓交流を除く)の試験を実施 ○最終選考(事前研修を兼ねて内閣府が実施) 時期は事業毎に異なる				
帰国後の活動	○各事業に参加した後は、日本青年国際交流機構(内閣府の青年国際交流事業に参加した青年等が自主的に組織している事後活動団体)に入会して、そのネットワークを活かしながら様々な形で活動することが基本となります。				

※なお、いずれも平成18年10月時点の予定ですので、実際に応募する際は、ホームページ等で応募要領(平成19年1月頃決定予定)を見て確認してください。

国際青年育成交流事業討議セッション 討議セッションは、日本青年約60名を募集し、世界各国から招へいた外国青年約100名と、分野ごとのコースに分かれて率直な意見交換を行い、我が国独自の考え方、あるいは世界で通用する考え方がどのようなものかという認識を深め、国際的対応力を身に付けることを目的に、毎年7月に4泊5日の日程で実施している事業です。応募は内閣府に直接行うなど、手続は上記事業と異なりますが、詳細については平成19年1月に他の事業と合わせて決定しますので、ホームページ等で確認してください。



「国際化時代における伝統文化～その継承と発展～」

2006年7月6日（東京全日空ホテル）

東儀 秀樹 氏（雅楽師）



雅楽について

僕は、雅楽という日本の伝統音楽の演奏家でもあり、ロックやジャズやクラシックなど西洋音楽の演奏家でもあります。今日は演奏家という立場から、国際交流を考えるきっかけを皆さんに提示できたらうれしく

思います。

雅楽は1400年ほど前に、大陸から海を渡って日本にきたものが、何百年もかかって日本の風土や日本人の気質に合うように整理され、日本独自のものとして定着した伝統文化です。雅楽は、主に皇室や神社仏閣での儀式など、天や神仏に捧げるための音楽として定着しました。平安時代の貴族たちは、物心がつくと、たしなみとして雅楽の楽器を習得したとされています。

今日は3種類の楽器を持ってきました。1400年前からほとんど形や音色を変えることなく、ずっと生き続けているものです。今、手にしている楽器は100年ほど前に作られたものですが、一千年以上前の制作方法が今も守られています。

雅楽では管楽器がメインで、最初に紹介するのが「笙」です。古代の人たちは、笙の音色は天から差し込んでくる光を表すと考えていました。ちょっと音色を聞いてみてください。

（笙の音色）

笙は1500年～2000年位前、シルクロードのどこかで生まれたと言われています。この楽器が、西方へとシルクロードを旅し、ヨーロッパに到達した後、何百年かを経て、パイプオルガンのルーツになりました。笙とパイプオルガンでは大きさが全く違いますが、音色が似ており、笙の音を出すシステムを分解していくと、パイプオルガンと一致するところがあります。

次の楽器は「篳篥」といいます。18センチの短い竹の筒でできていて、その竹の筒の上に葦で作ったリードを差し込んで吹く縦笛です。このリードには、サクソフォン、オーボエ、クラリ

ネットと同じ素材が使われています。笙の音色が天の光を表すのに対し、篳篥の音色は人間の声、つまり地上の音を表すと言われています。ちょっと音色を聞いてみてください。

（篳篥の音色）

篳篥は、カーブを描くような揺らぎを保った音を演奏できるのが特徴です。この直線的でない音色が、人間が歌いあげると同じような表現を可能にしています。篳篥は、オーボエのルーツになったと言われています。

最後の楽器は、「龍笛」です。龍笛という漢字の意味は「龍の笛」、ドラゴンのフルートです。その名の通り、天と地の間を泳ぐ竜の鳴き声を表したと言われています。ちょっと音色を聞いてください。

（龍笛の音色）

これまで紹介した3つの楽器は、それぞれ、天の音、地上の音、天地の間の音を表しています。この3つの楽器を合奏するのが雅楽の基本です。単に音や舞を楽しむだけでなく、合奏によって、宇宙空間を構築するという観念が織り込められており、哲学的な面があります。昔の人が天体の運行を計算して得た知識を音楽に対応させながら考えられたものであるゆえに、神仏や天、自然に捧げる音楽として重要な位置を占めることができたと言われています。

雅楽への目覚め

僕は日本文化の一つである雅楽を仕事にして生きていますが、雅楽を始めたのは非常に遅く18歳の時です。普通、こうした伝統芸能に取り組む場合、幼少の頃からいろいろなことを教えられ、気がついたら、技術なり心構えが備わっていたということが多いのです。

僕は、代々1300年もの間、雅楽を継承してきた家に生まれたのですが、現在では、雅楽を必ず継承しなければならないという状況ではありません。ですから、僕は自分で自分の人生を選ぶことができました。僕は



▲ 笙

小さい頃からビートルズが好きで、ロックやジャズも大好き、クラシックも聴いていました。つまり、日本の音楽以外の音楽ばかりを聴いて育ちました。中学、高校の時には、ロックバンドを組んで、将来ロックギタリストになりたいと本気で思っていました。すると、両親が「それほど音楽が好きなのなら、東儀家が受け継いできた雅楽に目を向けたらどうだ」と言いました。「ロックをやめて雅楽をやりなさい」と強制されたのではなく、選択肢の一つとして提示されました。

しかし、父自身は雅楽をやっていませんでした。父は海外勤務が多い商社マンでしたから、僕は1歳から7歳までタイのバンコクで、中学1~2年の時にはメキシコシティに住んでいました。当時はよく大使館関係者や商社関係者が集うパーティーに連れて行かれました。僕はそこで、大人たちが一生懸命交流している姿を見ていました。外国で生活していると、子どもの僕にも、別の国の子どもと交流する機会が多くありました。中学生の頃、僕のような子どもにも、大使館員と同じ責任があるのではないかと、日本人である僕は、間違っただ日本を外国の人に伝えてはならないし、相手の立場も間違いなく受け止めて理解したい、それが本当の笑顔を生み、何もかもうまくいくのにと考えたのです。

そういうこともあってか、雅楽をやった方がよいのではと両親から言われた時、確かにそうだと素直に思えました。特に、我が家は1300年も雅楽を守り続けてきたのです。それを守りつづけることに対する誇りや責任感などが高校生の僕にも芽生えてきました。年齢的には遅かったのですが、雅楽を始めました。

雅楽を通して日本を知り、日本を伝える

気がつくくと、雅楽の世界にすっかり入り込んでいました。雅楽を知ろうとすると、音楽だけでなく、その時代背景を知る必要もでてきます。雅楽は平安時代が一番盛んだったのですが、平安時代の貴族はどんなものを着ていたのか、どのような生活習慣があったのかなどを知りたくなっていきました。こうした知識があると、平安時代の書物が読みやすくなります。例えば、源氏物語には、これこれの演奏をだれだれがどこどこで行ったなどという芸術に関する記述がかなりでてきますが、普通の日本人にはぴんときません。しかし、僕はその時代の芸術に携わっているのだから、その場面を映像としてとらえること

ができるのです。雅楽に携わっていることが、音楽だけでなく、日本の歴史を紐解くきっかけにもなり、日本人とは何なのかについても深く考えるようになりました。



子どもの頃に海外で生活したことや、ロックやジャズに夢中になっていた時期があったので、小さい頃から雅楽だけをやっていたら気づけなかったようなことにも目を向けることができます。それは、雅楽の楽器を使ってピアノやシンセサイザーと一緒に演奏するという僕のオリジナル音楽につながっています。

最近では、ヨーロッパに行って、その国の楽器とその国の人たちとセッションをしたり、アメリカでオーケストラと共演したりしています。日本で、ロックバンドと共演したこともあります。こういった新しいことに次々と挑戦するには、心の奥底に古典に対する熱意や愛情や敬意、自分は日本文化を大切にしているという思いがなければなりません。日本の文化のほんの一部であっても、堂々と紹介できるという気持ちのよい状態でいられるのは、やはり日本文化に身を寄せているからだと思います。

国際人とは

日本では、小学校から英語の教育をしたほうがよいのではという議論がありますが、そんな必要はないと思います。英語の教育を受けたい人は、自分にあつた方法を自分で選ばよいのです。外国人の友だちを作るとか、行きたいときに留学することを考えるなど、いくらでも方法はあります。

もっと大切なのは、自分の国について知ることです。語学がどんなに達者でも、自分の国のことを知らなければ、語学の使い道が狭まってしまいます。流暢な外国語を話せたとしても、それはただ語学がうまい人というだけで、国際人とは言えません。国際人とは、自分の国について知っている人のことだと思います。自分の国のことをよく知っていれば、相手の国のことも理解しやすくなります。自分は日本についてこう感じているから、この人も自分の国に対してこんな風に思っているのかなと思いやることが出来ます。

僕が外国に行って、その国の民族楽器の演奏家とセッションをする時、その演奏家は、自分の民族楽器を誇らしげに見せて

くれて、演奏してくれます。ですから、僕も、おかえしに僕の音楽について説明します。こうして、相手に対する関心が深まり、たとえ、誤解があったとしても、思いやりややさしい雰囲気があると、誤解を簡単に正すことができます。

僕が外国に行く時、外国人は、僕に語学力など求めていないと思うのです。東儀秀樹という一人の人間に接するというよりは、東儀秀樹という一人の人間を通して、日本という国の背景、考え方、歴史などを知りたいのでしょう。ですから、自分が知っていることを、自分なりになんとか説明できれば、十分、国際人になれるのではないかと思うのです。日本の子どもに英語の教育をする時間があるなら、抹茶の飲み方とか、生け花の鑑賞の仕方など、自分の国の文化に接する場面を作ってあげたいのです。そうすれば、子どもたちが大人になった時、外国人から「日本にはtea ceremonyというのがあるのですね」と言われた時、過去に一度でも体験したことがあれば、「私には難しかった」とか「ちょっと苦くて飲めなかった」など何か答えることができます。こうした意見でも、きちんと相手に伝われば、全く何も知らないよりも、はるかによい答えになります。

伝統あるものの素晴らしさ

雅楽の楽器の作り方にはとても興味深いものがあります。例えば、この楽器（箏）は、桜の木の皮をはいで、細くひも状にしたものを竹の筒に巻き、漆で仕上げられています。なぜ、桜の紐を巻くのかというと、日本は夏は暑くて冬は寒く湿度が著しく変化する国なので、この環境に合わせてちょうどよい締め具合や緩み具合を自然と対話しながら決めてくれる素材がこの桜の皮なのです。日本だからこそ、この素材でこの楽器ができたのです。

この素材をくっつけるのに「にかわ」という動物の骨の中の組織から作られたのりを使います。現在では、瞬間接着剤という強力なのりがありますから、それを使えばよいという方がおられるかもしれませんが、確かに、瞬間接着剤はとても便利なのですが、便利なものが本当によいものなのかどうか考える必要があります。例えば、この桜の紐がはがれたとします。それを古来の「にかわ」ではなく、瞬間接着剤でくっつけたとします。その後、竹にひびが入った場合、瞬間接着剤で貼りあわせてあると、はがすことができません。無理にはがそうすると、竹の組織ごと削り取らなければなりません。

そんなことをすれば、この楽器の美しさが損なわれますし、楽器を修理することができません。

しかし、「にかわ」なら、ある程度の温度調整をすると簡単にはがすことができます。はがして調整しなおして、くっつけて元通りに直すことができるのです。ですから、「にかわ」は、扱いが非常に面倒で、瞬間接着剤のように瞬時にくっつくという利便性はありませんが、後々の楽器の手入れのことを考えるととても便利なのです。

「最新のもの、便利なもの、イコール良いもの」ではないというのが、僕が雅楽に接して感じた価値観でもあります。つまり、古臭いように見えても、違う観点から見ると、新しいものかなわぬ力強さや新鮮さがあります。どんな時代になっても、古くからあるものには、新しいものが及ばない力が、伝統の中に存在しているのです。ですから、そのようなものを発見した古代人の鋭さとか、考え抜かれた結果などをないがしろにはならず、大事にしなが、新しいものも取り入れ、そのバランスをいかに保っていくかが、今を生きる、あるいはこれから未来を生きる人たちの責任ではないかと思うのです。

例えば、日本では、昔はおにぎりを竹の葉でくるんでいましたが、いまではビニールで包まれています。外国人が来たときに、日本人の一般的な食事としておにぎりを出す場合、おにぎりが竹の皮で巻かれているのと、ビニールでまかれているのとでは、日本に対する外国人の印象は大きく変わるはずです。こういった日常の中にも、日本の伝統と言えるものがたくさんあります。「伝統」というと重々しい感じがして、伝統芸能や芸術などに目が向きがちですが、何気ない普段の生活の中に、誇れる伝統、守りたい伝統があり、これが、国際化に大いに役立つものだということをぜひ知っておいてください。



僕の大切な5K

個人的な話ですが、僕は好奇心が旺盛です。この僕の好奇心が、雅楽という文化を突き詰めさせ、雅楽の楽器でビートルズを吹いたらどうなるかといったあり得ない未知数に対する挑戦を可能にしています。

好奇心の次に大切にしているのが観察力です。例えば、ある人が面白そうなことをやっていたり、外国でおもしろいものを見たりした場合、自分だったら、日本だったらどうなるかという比較する観察力が非常に大切だと思います。「日本にはあんなものはなかったなあ。日本人だったらこんな風に変えるかもしれないなあ」といった観察を大事にしています。

その次は行動力です。観察して自分だったらどうするだろうと思った瞬間、試してみて、何度でも納得のいくまで行動します。一回やってみて、面白そうなことができたとしても、そこで納得してしまわないで、もう一度やってみたら、もっとうまくできるかもしれないという向上心を大切にしたいと思っています。さらに、なんだ、自分にもできるじゃないかなどと思っていると、足元をすくわれますから、謙虚さも大事にしています。謙虚さとは、初心に戻って「あの頃一生懸命いろいろなものを観察していた自分がいたではないか、その結果、やっとここまでできるようになった。あの頃の気持ちが、現在の自分を形作っているのだから、あの気持ちをいつまでも大切にしなければならぬ」という感覚を忘れてはなりません。

この好奇心、観察力、行動力、向上心、謙虚さは、日本語で言うと全部頭文字がKで始まる単語ですので、「僕の大切な5K」と言っています。この5つを意識していると、自分の知識欲が増し、フットワークも軽くなり、行動力が高まるような気がします。とは言っても、僕自身、この5つの点を特に努力してきたわけではありません。ごく自然に生きてきて、自分の過去を振り返ると、僕は好奇心が旺盛で、観察力があるようだと気付いただけなのです。しかし、好奇心があったからこそ、いろいろなことを知りたいという動機付けになったのは事実です。



最後に

僕は小さい頃、タイに住んでいました。好奇心が旺盛だった

ので、町に出て行ったら両親が衛生面で不安がるようなものを好んで食べていました。隠れて何でもかんでも口にしては、たまたま幸せな気分でした。だから、僕は今でもタイのことが大好きで、第2の故郷といってもよいくらいです。

最近、両親といっしょにタイに行ってレストランで食事をするがありました。出てきた料理を見て、両親は「こんな料理は見たことがないし、昔もなかった」などと言うのですが、僕は全部知っていたりします。ただ、僕も忘れていた料理があるのですが、「これは食べたことがないような気がする」と思って口にすると、「これ、知っている」と簡単に思い出せるのです。僕は今、46歳なのですが、この年になっても、幼稚園の頃に口にしていたものを僕の体は確実に覚えているのです。当時、いい加減なものを食べさせられていたら、今でも僕にはいい加減な基準しか備わっていなかったでしょうが、現地の人が普段の生活の中で食べているものを日々味わっていたからこそ、僕の中に確かなものさしができ上がったのだと思います。このことは、僕にとっては誇りでもあります。僕にはタイ人と同じ味覚がある。それは本物なんだぞ、という誇りです。

テレビの仕事などで海外へ行くことが多いのですが、時間があればひとりで庶民が食事をしている場所へ行って、現地の人と同じものを食べています。そうすれば、その国での暮らしぶりがわかりますし、同じ素材でも、こんな風に食べるのかといった発見があり、それが僕の大きな楽しみにもなっています。

日本に外国人が来たときには、BGMにお琴の調べが流れているような高級レストランではなく、僕たちが普段行くラーメン屋さんにも連れて行きます。もちろん、映画に出てくるような日本レストランに行きたいと言われれば連れて行きますが、日本人もほとんど行かない所なんだよと説明をして、楽しんでもらうように心がけています。自分の好みを相手に押し付けるのではなく、高級な料亭もあるし、鉄板焼きもある、屋台のラーメン屋さんもある、というように相手にいろいろなものを提示して、その結果、相手が何かを感じ、興味をもってもらえるようにするのが自分の役目だと思っています。

日本とはこういうものなのですよと、こちらが一方向的に示すのではなく、相手が自然にもっと日本のことを知りたいなと感じられるように、僕も含め、皆さんも自分自身の器を大きくできるように努めていきたいものです。

討議セッション

「討議セッション」は、7月11日～15日の間、国際青年育成交流事業（外国青年招へい）のプログラムの一環として、世界11か国から招へいた外国青年約90名と、国際的な問題に関心の深い全国から選ばれた日本青年60名とが、テーマごとのグループ（6コース）に分かれて率直な意見交換を行うことにより、それぞれのテーマについて、日本独自の考え方、あるいは、世界で通用する考え方がどのようなものかという認識を深め、国際的対応能力を身につけることを目的として実施されました。

6コース：企業の社会貢献、環境、教育、情報、伝統文化、ボランティア
 参加国：バルト三国（エストニア共和国、ラトビア共和国、リトアニア共和国）、ブルガリア共和国、カンボジア王国、ドミニカ共和国、ヨルダン・ハシェミット王国、モザンビーク共和国、ミャンマー連邦、ニュージーランド、チュニジア共和国

日程	プログラム
7月11日（火）	日本参加青年参集、ディスカッション講座
7月12日（水）	外国青年との交流会、グループ別ディスカッション
7月13日（木）	グループ別課題別視察
7月14日（金）	グループ別ディスカッション、発表会準備
7月15日（土）	発表会、修了式



特定非営利活動法人 人道目的の地雷除去支援の会東京事務所（JAHDs）を訪問（企業の社会貢献コース）



コース内での発表の様子（教育コース）



（株）資生堂経営企画部CSR室参事 薬剂師岩本中氏による講演（企業の社会貢献コース）



東京学芸大学の学生との交流（教育コース）



ブラインド・ウォーク（環境コース）



エコ・クッキングに挑戦（環境コース）



読売新聞社を訪問（情報コース）



神奈川県ライトセンターで講演者の青山しのぶ氏と交流する（ボランティアコース）



裏千家での茶道体験（伝統文化コース）



真剣に話し合う参加青年（情報コース）



コース活動を楽しむ（ボランティアコース）



自国の伝統文化について発表する（伝統文化コース）

ボランティアコース 参加青年 小林志保

討議セッションで、各国の青年や日本参加青年と出会い、自分の体験したことのない話や彼らの考えを聴き、考えさせられることは多かった。自分自身を見つめ問いかける時間がとても多く、In my opinionとして自分の意見を語ることの大切さと人の意見を受け入れ、否定しないことの大切さを学べた。ボランティアに対する思いや行動は人それぞれであり、どれが正しくてどれが間違っているとは一口には言えない。そして結論も決して一つではない。ボランティアは責任なのか、義務なのか、それともそれぞれが決めるべき自由なのか。このように色々な立場、色々な目線から見つけた“opinion”をどの言葉と考えを持って行動に移すかが、私たちひとりひとりの答えだと思う。

最後にこの場を借りて、討議セッションで出会ったスタッフの方、参加青年に感謝の気持ちを伝えたい。

討議セッション中の各種イベント

コースを越えた交流を行い、異文化理解の促進を目的として、趣向をこらしたイベントが実施されました。



全体アイスブレイキング



ナショナル・プレゼンテーション "World Performance Live!"



交流プログラム "Global Stage in Tokyo 2006"



ミャンマーの展示

International Youth Development Exchange Program 2006
Discussion Session
 内閣府 Cabinet Office 財青少年国際交流推進センター
 Center for International Youth Exchange



ボランティアコース参加青年によるコース発表

コース発表

地方プログラム

外国参加青年は7月17日～24日の間、4府県（滋賀県、京都府、和歌山県、鳥取県）に分かれて地方プログラムに参加しました。各地では、表敬訪問や地元青年との交流、施設訪問など、さまざまな活動を行い、2泊3日のホームステイも実施されました。

訪問府県名	国名
滋賀県	ドミニカ共和国、チュニジア
京都府	エストニア、ラトビア、リトアニア
和歌山県	ブルガリア、モザンビーク、ミャンマー
鳥取県	カンボジア、ヨルダン、ニュージーランド

滋賀県



湖南省立石部小学校を訪問



邦楽体験



ホストファミリーと別れを惜しむ外国青年

京都府



古代友禅苑にて京友禅染体験



京都府立嵯峨野高等学校での交流プログラム



京都府美山町にて日本文化体験

和歌山県



JAありだ中央選果場訪問



歓送会



海岸清掃のボランティア活動に参加



和歌山県立星林高等学校での交流プログラム

鳥取県



鳥取砂丘訪問



鳥取産業技術センター見学

外国参加青年の感想

アルセニオ・デ・カストロ・ホセ・サルメント（モザンビーク）

ホームステイ中、ホストファミリーから受けた温かいもてなしに、非常に感動しました。モザンビークの青年を家に滞在させてくださった日本人家族の皆さまに、心から感謝の意を表します。

個人的には、心から互いを理解しようとするとき、言語の違いはそれほど障害にならないことを学びました。日本で得たこの経験を大切に、他の青年たちと共有していくつもりです。



第12回「青年の船」参加青年 尾身 伝吉 さん

新潟県十日町市在住の木版画家 尾身伝吉さんをお訪ねしました。ベトナムで仕事をしているご親戚がおられたため、幼い頃から海外や、青年海外協力隊にあこがれていた尾身さんは、1978年に第12回「青年の船」に参加されました。船内では地味で目立たない参加青年だったとおっしゃる尾身さんが「青年の船」からどのような影響を受けたのか、また、版画家として出発されたきっかけなどを、中魚沼郡津南町にある「尾身伝吉版画館・魚沼アートランドギャラリー」でうかがいました。

第12回「青年の船」に参加されたきっかけは何でしたか。

僕が入っていた青年団で総理府の交流事業に参加した先輩や、青年会議所が実施する別の交流事業に参加した人からいろいろ話を聞いていて、おもしろそうだなと思っていたことが直接のきっかけです。

また、僕のおじは当時としては珍しいことでしたが、ベトナム戦争が始まる前からベトナムに行っていて、ODA（政府開発援助）関連の仕事をしていました。サイゴン（現在のホーチミン）で発電所の建設をしていたんです。時々、ベトナムからエアメールをもらって、カッコいいなあ、と思っていましたから、外国へのあこがれはありました。

さらに、19歳の時、永六輔さんの講演を聞く機会がありました。僕にとっては実に印象的な話で、新聞やテレビの情報をうのみにするのではなく、自分の五感で感じたことこそを信じなければならぬという内容でした。この講演を聞いて、これまで僕は海外に行ってきた人の話をいろいろ聞いてきましたが、自分も実際に海外に行って、外国の人たちのありのままの暮らしを見、その国の人たちが食べている食事をするなど、自分の目で確かめてみたいと強く思うようになりました。

22歳の時、青年会議所が主催する船の事業があったので、応募しようとした

ところ、すでに募集が終わっていました。それで、総理府の第12回「青年の船」事業に応募し、参加が決まりました。

50日間の事業に参加するため会社を休むことは大変ではありませんでしたか。

当時、僕は十日町市内の織物会社で働いていました。もともと、ちゃらんぼらん性格だったこともあって、もし、事業参加のために会社を休めないのなら、会社を辞めようと思っていました。当時は着物がよく売れて景気がよかったので、会社を辞めてもデザイナーとして独立する道もあると考えていました。

会社に事情を説明したところ、ありがたいことに、給与は出せないけれど休んでもかまわないし、事業が終わったらまた仕事に復帰できると言ってくれました。実際に船に乗ってみると、休暇が認められず、会社を辞めてきた人がいたので、僕は恵まれていたなとあらためて思いました。

印象的だった訪問国はどこですか。

初めての海外旅行でしたから、何から



▲スリランカで中学生と卓球をする
(本人中央、赤いシャツ)



▲尾身伝吉版画館・魚沼アートランドギャラリー

何まで珍しいことばかりでした。雪の降る新潟からスーツケースを引っ張って東京へ行き、晴海から出航して最初の寄港地がシンガポールでした。真っ青な空に、深い青色の海、真っ赤なハイビスカス。もうこれだけでもびっくりでした。

特に印象的だった国は、パキスタンとスリランカですね。スリランカでは中学生と卓球の試合をしたのですが、負けてしまいました。子どもに負けるなんて…とショックでしたが、現地の人と交流するのがとても楽しいことに気がきました。僕はプログラム中、お茶やお花、武道などいわゆる日本の伝統芸能を率先して披露することはできなかったのですが、中学生の頃に卓球をしていたので、卓球と笑顔で現地の青年と交流できて本当によかったと思いました。

パキスタンでは、女子高を訪問して学生と交流する機会がありました。それまではまったく見知らぬ人たちだったのに、住所交換をして知り合いになれるわけですから、交流って本当に楽しいなと思ったことを覚えています。帰国後、数人と文通するようになり、家族の写真を送っても



▲パキスタンで女子高を訪問する
(本人左から3人目)

らったりもしました。文通のおかげで、いつまでも船での楽しい思い出の余韻に浸ることができて、僕にとってはいっそう印象深い国になりました。ただ、僕は英語が得意ではなかったのが残念でしたね。船内で印象的だった出来事がありますか。

それが特に覚えていないのです。プログラム自体はとても楽しかったのですが、僕は地味な人間で、写真撮影の時には、真ん中ではなく、いつも端の方で写っているようなタイプで、事業中は地味な50日間を過ごしたのです。船内でいろいろ目立つことをする人もいて、そういう人をうらやましいなあとは思っていましたが、同じようなことを僕にはとてもできそうにありませんでした。それに、語学の得意な人が注目される傾向がありましたから、英語が苦手な僕はますます目立ちませんでした。

ただ、船の事業からはその後何十年も持続する感動のようなものを与えてもらったと思っています。事業に参加して「楽しかった、よかった」だけで終わってしまうのではなく、その時に得られたエネルギーの一部を今でも持ち続けることができているのです。

「天は二物を与える」という現実

この事業に参加して一番ショックだったのは、訪問国での体験や、外国青年との違いよりも、一緒に参加した日本青年との違いでした。僕は「天は二物を与えず」という言葉を真実だと信じていましたが、「青年の船」に参加してみると、天が「二物」どころではなく「三物」も「四物」も与え

ているような人たちがいることに気づきました。優秀で、美しく、性格もよく、裕福な人たちが大勢いたのです。

こんな優秀な人たちと同じ土俵で競うことは自分には不可能だと感じました。そんなことをしても自分にとっては何の意味もないはずです。そうではなく、自分が持っているものを活用し、自分が置かれている環境の中でがんばっていくことこそ最善だと気づきました。ですから、帰国後はここ新潟で、自分らしいこと、自分にしかできないことをやっていると決めました。例えば、ホームステイの受け入れなどで、自分が「青年の船」に参加しているときに楽しめたことを招へい外国青年にもしてあげようと思いました。

後に、中国やマレーシア青年の招へいのお手伝いをしましたが、これをきっかけに香港との交流が始まりました。

「青年の船」がもたらした変化

「青年の船」による大きな変化と言えば、僕自身が同じ第12回「青年の船」の参加青年と結婚したことです。それに、僕の家内の影響だと思いますが、家内の姉も後に「青年の船」に参加しています。家族や親戚の間に共通の体験があるのはよいことです。大阪にある家内の実家に行って、いまだに船が話題にのぼることがあります。当時の班員の近況で盛り上がることもあります。もし、「青年の船」の経験のない人がその場にいたら、まず、「青年の船」が何なのかということから説明しなくてはならないし、いくら説明したとしても、船の事業の本当のよさは乗った人でないとわからないと思うのです。

版画を始められたきっかけは何でしたか。

本格的に木版画を始めたのは、1982年、27歳の時からです。十日町市内の公民館で活動していた木版画グループに参加したのがきっかけです。高校生の頃から年賀状は版画で作っていましたが、特に、

小さいころから版画をやろうと思っていたわけではありませんでした。

ただ、子どもの頃から絵は好きでしたね。小学校5年生の時、学校の先生から「君は絵がじょうずだからがんばれ」と言われたことがありました。ほめてもらうとうれしいですね。特に幼い頃の先生の一言には重みがあります。子どもの一生を左右することもありますから。中学2年生の時の担任の先生にも絵をほめてもらったことがありました。国語の先生だったのですが、版画もなさる方で、実は、3~4年前に先生と一緒に香港に行って展覧会を実施しました。自分の担任の先生と共通の活動ができるなんてすばらしいことです。

版画を始めた当初は、自分の作品を人様に見ていただくという気はまったくなかったのですが、作品が増えてきた頃、神楽坂に住んでいる知人に一度展覧会を試みたらどうかと勧められ、それもいいなと思って初めて実施しました。

展覧会をすると、作品を見てくださった方々から、ほめられたりけなされたりするわけです。ほめられるとうれしくなってさらにやる気が出ますし、けなされると「なんだ、このやろう」などと悔しくなってまたやる気が出るのです。そんなことを繰り返しながら、展覧会の機会が増えていきました。

1985年国際青年年の際に、ホームステイの受け入れをして、ある香港の留学生のお世話をしました。彼は新潟にたいそう興味を持ってくれ、これがきっかけとなって香港との交流が始まりました。



▲パキスタンのカラチで馬車に乗って買い物に出かける



▲香港城市大学に作品を寄贈する

1991年「フリンジクラブ」、1996年「香港視覚芸術中心」、1998年「香港中文大学逸夫書院大講堂展覧廊」、2000年「香港芸術公社」、2001年「香港油尖区文化芸術協会」にて個展を開き、新潟・香港文化交流2001を開催するなどして現在に至っています。

世界各地で個展を開催されていますね。

これまで、香港、シンガポール、ハワイ、ソウルで実施し、今年はアメリカでも行いますが、すべて友人、知人の力によるものです。例えば、ソウルの「キムネヒュンアートギャラリー」で個展を開催したときは、会場の手配などを知人が全部してくれました。ソウルの版画協会の方々ともつながりができて、韓国、中国、香港、日本などの版画のネットワークができるといいですね、という話も出ています。

僕は新婚旅行でシンガポールに行きました。シンガポールは第12回「青年の船」の最初の寄港地だったので、思い入れがあったのです。シンガポールでは、奈良県出身のご夫妻とご一緒する機会がありま

した。彼らはシンガポール勤務になるかもしれないので、下見を兼ねて旅行しているところでした。別れ際に「また機会があったらお会いしましょう」などと言っていたのですが、後に、この方はある合併会社のトップになって、実際に僕をシンガポールに招いてくださったのです。版画展も開いてみませんかと勧めてください、すべて手配してくださいました。お客様も大勢来てくださったのですよ。

まったくの他力本願ですが、いろいろな方にたいそうよくしていただいて、とんとん拍子でここまでできました。本当にありがたいことですね。もちろん、普段から努力しなければいけません、ふっと力を抜くと、思わぬ形で周りの人が協力してくれて、物事がうまくいくことがあります。まるで、ご褒美のように形になることがあるのです。だから、ただひたすら、がむしゃらに突き進むだけでもいけないし、怠けていてもいけないですね。自分にできることをのんびりと続けていきたいと思っています。

最後に若者に向けてメッセージをお願いします。

僕が「青年の船」に参加した時と、現在ではすいぶん時代が変わっていますから、当てはまらないこともあるかとは思

ますが、最近、僕自身が感じているのは、シンプルな形で自分が本当に伝えたいことを伝えていくことが大切だということです。僕が版画をやっているの、このような表現方法になるのですが、シンプルな色や形が一番だということです。

2年前の新潟県中越地震の際にも感じましたが、生きていくのに本当に必要なものは少ないのです。これからは、余計なものを持たないという生き方をしていくべきなのでしょう。

これまで日本は、高度経済成長の時期を経験し、とにかくたくさん手に入れよう、全部自分のものにしよう、という意識がありました。欲張りすぎたために、それまでそこそこ豊かで幸せだった生活が、バランスを崩してしまった感じは否めません。

今持っているもので満足し、不要なものは整理して、シンプルの中で生きていけたらと願っています。



▲10年以上お付き合いのあるアーティストと記念撮影 (香港セントラル地区のバンクオブアメリカビルにて)

尾身さんの経歴

- 1955年 新潟県十日町市に生まれる
- 1977年 緋のデザインで全国織物産地競技大会 通商産業大臣賞を受賞
- 1991年 香港「フリンジクラブ」にて個展
- 1993年 シンガポール「リバーサイドギャラリー」にて個展(8月)
東京神楽坂「アユミギャラリー」にて個展(11月)
- 1997年 ホノルル「日本文化センター」にて個展
- 1998年 香港中文大学逸夫書院大講堂展覧廊にて個展
平成11年用地方版(新潟県)年賀はがきデザイン最優秀賞受賞
- 1999年 ソウル「キムネヒュンアートギャラリー」にて個展
- 2001年 新潟・香港文化交流2001プロデュース
日貿出版社より初の画文集「ふるさとからの木版画」出版
- 2006年 ジャパン・フェスト2006出品(アトランタ)(9月)

尾身さんの著書

「ふるさとからの木版画」

日貿出版社刊
〒101-0064 東京都千代田区猿樂町1-2-2
TEL: 03-3295-8411
B5変形 96頁 定価 本体¥2,200+税
<http://www.nichibou.co.jp/Books/ISBN4-8170-5030-6.htm>

尾身さんのHP

「尾身伝吉版画館へ、ようこそ!」
http://artpalette.jp/index.php?main_page=index

インタビューを終えて

人をうらやんだり、ないものねだりをしたりするのではなく、「自分が持っているものをいかし、自分が置かれている環境の中でシンプルに生きていく」という言葉に心が洗われる思いがしました。尾身さんと一緒に街中を歩いていると、尾身さんに話しかけてくる人々の多さに驚かされつつも、その穏やかなお人柄のゆえだろうと納得できました。

平成18年度 国際交流を考える集い(ブロック大会) 報告

中国ブロック青少年国際交流を考える集い(平成18年8月5日(土)～6日(日)) 広島青少年文化センター



広島県青年国際交流機構副会長 小野 雅子

2日間のプログラムは平和一色。初日は、広島市立亀山南小学校の原田幸子教諭による「平和について考える(ONEピース運動について)」の基調講演と、ヒロシマ・ナガサキならではの平和学習にヒントを得たワークショップ「平和のためのアクションプラン～私たちにできることは?～」を行いました。

2日目は、眠い目をこすりながら早起きし、平和記念式典に参列。61年前の同日に原爆が投下された午前8時15分に、1分間の黙祷を捧げ、戦争に対する怒りや

悲しみを覚えると同時に、「平和のためにとにかく何かしなくちゃ」と、決意を新たにさせられました。

最後に広島名物・お好み焼きを食べて解散。今回は中国地方からだけではなく、千葉県や愛知県など遠方から駆けつけてくださった方もあり、参加者それぞれが平和について考え直す大変良い機会になったと、好評のうちに幕を閉じました。

北信越ブロック青少年国際交流を考える集い(平成18年8月19日(土)～20日(日)) パレプラン高志会館教職員共済組合会館

富山県青年国際交流機構会長 日南田 美幸

「学んで、考えて、交流」できることをめざして、「『より豊かな未来へむけて』～人と社会が果たす役割～」をテーマにプログラムを組みました。初日は、日本海側で唯一の国連機関で、日本海を中心に海洋環境保護活動をする国連環境計画(UNEP)北西太平洋行動計画(NOWPAP)RCU富山事務所総務担当事務官馬場典夫氏による「海洋環境と国際協力」についての記念講演と、以下の3つの分科会を行いました。

分科会①「みんなの世界地図をつくらう」:昨年度ハンガリー派遣団の織田裕子さんがファシリテーターとなり、今まで訪れた国での体験を共有。分科会②「立山こころ文化」:日本を代表する霊山、立山の立山信仰について富山県立山博物館米原寛館長より学習。分科会③「和本作り」:富山県の五箇山和紙を使った和本作りに挑戦しました。

2日目は、北信越ブロックからの参加者が「世界青年の船」事業の報告を、富山県からの参加者が「国際青年育成交流」事業(ハンガリー)の報告を、愛知県からの参加者が「東南アジア青年の船」事業の報告をしました。続いて大橋副会長より本部の会務報告、各県代表より特色ある事業について報告がありました。昼食後には、富山県の名産、ます寿し作りに21名が挑戦しました。富山県では、8年ぶりのブロック大会開催でしたが、75名の参加者があり、これまでのイベントで構築されたネットワークの大切さを実感する良い機会となりました。



北海道・東北ブロック青少年国際交流を考える集い(平成18年8月26日(土)～27日(日)) 土湯温泉「観山荘」

船と翼の会ふくしま会長 菅野 裕子

「地域社会における国際交流活動を推進しよう～安心して共生できる風をつくろう!今私たちにできることから～」というスローガンを掲げ、昨年12月に実行委員会を立ち上げて、準備してきました。

初日には、価値観の違う人との接し方を考えようと、「多文化共生ワークショップ」を実施。①地球環境保全 ②地元からの情報発信 ③外国籍の人々と地域で共に暮らすこと ④国際交流マネージメント～学生による相互交流～の4つの分科会で話し合い

ました。懇親会では、今年度内閣府青年国際交流事業参加者の北海道・東北ブロック合同社年会を実施。派遣者に自己紹介をしてもらい、実行委員会が「アドバイス集」を贈呈しました。また、「IYEO O×クイズ」を行い、優勝チームには桃と梨それぞれ1ケースをプレゼントしました。

2日目には、「事後活動のためのディスカッション」を実施し、参加者がIYEOに対する期待や要望を語りました。また、参加者の自己PRや事後活動等をまとめた冊子を作成しました。

今回の大会では自分の意見を発表する機会が多くありました。そこで自分の思いを再確認したり、違う意見を聞いて考えさせられたりしました。この経験を今後の事後活動に活かしていきたいと思えます。



九州・沖縄ブロック大会のご案内

平成19年1月27日(土)28日(日)に九州・沖縄ブロック大会を開催します。

今回は8年ぶりの沖縄開催ということで、実行委員一同楽しいプログラム作りに励んでいます。一人でも多くの方の参加をお待ちしております。

【テーマ】「おきなわ おおきな! おっきな輪!
～2日間であなたが変わる～」
国際交流で使えるアイスブレイク等を通して、
初対面の人でもすぐにコミュニケーションを
図る方法などを紹介したいと考えています。
また、分科会では沖縄の文化体験や青年海外
協力隊OB・OGによる体験談等も予定して
います。

【日程】平成19年1月27日(土)～28日(日)

【会場】沖縄県青年会館(沖縄県那覇市久米2-15-23
TEL:098-864-1780)

(<http://www.okinawakenseinenkaikan.or.jp>)

【参加費】全日程参加 大人5,000円 高校生以下
1,000円(宿泊費を除く)

※宿泊するホテルは参加者の各自手配
(ホテルバック等)とする。

【問合せ先】沖縄県IYEO会長 豊川 博史
E-Mail: okinawa@iyeo.or.jp もしくは
hirofumi-toyokawa@orionbeer.co.jp
TEL&FAX: TEL: 098-877-5171

FAX: 098-877-3192

申し込みについては、11月頃を予定しています。

詳細はIYEO関連メール等をご覧ください。

「近畿ブロック大会 in 兵庫」のご案内

平成19年2月3日～4日に近畿ブロック大会を開催します。場所は「バレス神戸」JR元町駅より徒歩5分です。
詳細は <http://www.iyeo.or.jp/hyogo/> をご覧ください。

～讃岐まんてが通信～

香川県青年国際交流機構 井川 美紀

今回は、全国大会にお越しの際に是非使っていただきたい
讃岐弁講座をお届けします。

讃岐弁は、京阪式の方言の中でも、平安以来のアクセントが
よく保存されているそうです。雅な言葉なんですねえ!

「なんがでっきょんな?」直訳すると「何ができていますの
ですか?」ですが、挨拶として「ご機嫌いかがですか、最近どうですか」
といったニュアンスになります。

お腹が「おきる」…お腹が「起きる」?これは、満腹になる
という意味です。食事の後は、「あ～、お腹おきたわ～!」と言
いましょう!

「じゃんならん」どうしようもない、どうにもならない、の意。
「そんなこと言うても、じゃんならんが～」

「うまげ」素敵、かっこいい、の意で、おいしいという意味では
ありません。「その時計、うまげなの～」と言ったら、「その時計、
素敵だね、カッコイイね」となります。

「うれしげ」「あいつ、ちょっとうれしげでないか?」訳すと、
「あいつ、ちょっと生意気だと思わない?」といった感じでしょうか。

「嬉しそう」という意味ではありません。

「むつごい」これはとても奥の深い言葉です!しつこい、味が
濃い、油っこいといった意味(他にも微妙なニュアンスが含まれて
いるのですが)で、「この天ぷら、むつごいな!」のように使います。
しかし、食べ物だけに使うのではなく、「あの人の顔、むつごいな」
のように、人に対しても使います。これを使いこなせれば
すっかり讃岐人です!

早いもので、今回で「讃岐まんてが通信」は最終回になり
ました。気が向くままに香川のことを書いてまいりましたが、
参考になったでしょうか?これを読んで、少しでも香川県に興味を
持ち、全国大会に参加していただけたら幸いです。

香川IYEOのHPでも全国大会に関する様々なお得情報
(宿泊情報、交通手段、スタッフからのコメント等)を掲載して
おりますので、まだ参加を決めかねている方はご覧のうえ、
是非お申込み下さい!

<http://www.iyeo.or.jp/kagawa/>

それでは、12月2日に琴平でお会いしましょう!

日韓交流が引き起こす『未来連鎖』を信じて

第三回日韓交流連絡会議 実行委員長

平成17年度「日本・韓国青年親善交流」事業参加青年
齋藤 健太



▲完成した共同制作「未来連鎖」

日韓交流連絡会議は、「日本・韓国青年親善交流」事業の既参加青年が、参加年度を越えた仲間の絆や日韓交流への想いを共有し、更なるネットワークを構築する目的で開催されている。

3年目を迎える今年の日韓交流連絡会議のキーワードは「未来」。8月25日から27日までの3日間、韓国・ソウル近郊の富川市ボクサゴル研修院にて開催され、日本側26名・韓国側23名、計49名の既参加青年が集った。そこで私が試みたことは、「実感」を伴う人的ネットワークの構築である。

プログラムの一環であった共同制作「未来連鎖」は、私たちの「未来」が連鎖して永遠に広がっていくイメージを形にした。作品の色彩を成す280枚の色紙の1枚1枚には、参加者が思い描くそれぞれの「未来」に対するイメージが肉筆で書かれており、これらが集合した時に色とりどりの鮮やかな未来色が放たれる。さらに、それらが連鎖しつつ互いの輝きをさらに引き出すことができるよう、黒いラインで「未来」という文字を作り、未来型ネットワーク接続環境を整備した。

またグループディスカッションでは、「未来に残したいもの」という議題に取り組み、「未来」というとても抽象的な概念を

より具体的な事象としてとらえられるよう、思考の柔軟体操を行った。

そして、これら一連の「未来」という一見、取っ付きにくいテーマを扱うのに必要不可欠な柔らかい交流の雰囲気醸成には、日韓の実行委員双方が協力して作り上げたアイスブレイキングが大いに役立った。

第三回会議実行委員としての経験を積んだ今、私は日韓交流連絡会議の在り方に大きな期待を寄せている。それは、特定の派遣プログラム参加者に限定した募集を行うのみならず、日韓交流に興味を抱くより広い層の方々に参加、及び支援を促す活動を展開することで、日韓交流における「実感」を伴う人的ネットワーク構築を拡充していくことへの期待だ。そのためには、より一層プログラムを充実させる必要があり、これまで以上に日韓の実行委員の密接な協力体制を整え、魅力ある会議運営を行うことが求められるのではないだろうか。

近い将来、さらに美しく輝く日韓の未来像を描ける日が来ることを祈りながら、第四回日韓交流連絡会議を心待ちにしたいと思う。

日時		プログラム内容
8月25日 (金)	17:00	オリエンテーション
	19:30	アイスブレイキング
	21:00	交流会
8月26日 (土)	09:00	開会式
	10:00	施設見学
	15:00	ディスカッション
	19:30	共同制作
8月27日 (日)	09:00	ディスカッション発表会
	11:00	閉会式



第3回「青年の船」(37周年)石川大会

「船」に戻る時間

大会実行委員 石間 進二

第3回青年の船の会は、熱海・東京・沖縄・北海道・高知・岐阜・青森・宮崎に引き続き、平成18年8月26日～28日、37周年石川大会を開催、しばらくぶりに「船」に戻る時間を楽しんだ。かつての若き仲間も今や57～62歳、定年をさしはさむ年頃とはなったが、まだまだ会社や地域で責任ある立場にある者、議員などの要職にある者も少なくない。



多忙を極めるその中であって全国から集える仲間は101名、大会ごとに漸減しているが、心ならずも不参加の仲間からも多くの便りあり。和倉温泉でのゆったりした懇親会、天候に恵まれた能登観光に十分満足した仲間は、新たな活力を充電できたと、2年後の広島大会での再会を約して全国に散っていった。「船」の友情はまだまだ続く。

KODAMA通信〔昭和44年12月～昭和49年3月、1号～17号〕の復刻版(2006)61頁を配布、大好評。

第19回「青年の船」

木田 博信



2006年は第19回「青年の船」を下船してちょうど20年。

そこで7月17日「海の日」、1組のメンバーを中心とした多くの仲間が神戸港のにつぼん丸へ集まり、同窓会を開催しました。

につぼん丸は第19回当時と比べ物にならない豪華な客船に変わっていて皆びっくり。

夕刻からは1泊2日瀬戸内クルーズに出航し、夜遅くまで20年前の思い出話に花が咲きました。

国連の記念日

世界の子どもの日 (Universal Children's Day)

1954年11月20日の国連総会で、子どもたちの世界的な友愛と相互理解を促し、子どもたちの福祉を増進させることを目指して国際デーとして制定されました。また1959年には「児童の権利宣言」、1989年には「子どもの権利条約」がそれぞれ11月20日に採択されています。

■11月・12月の記念日 (計16日設定のうち6日を抜粋)

11月・12月		
11月	16日	国際寛容デー
	20日	世界の子どもの日 アフリカ工業化の日
12月	3日	国際障害者デー
	10日	世界人権デー

世界の子どもの権利を守るために ～UNICEFの活動紹介～

ユニセフは、第二次大戦で被災した子どもたちの緊急援助を目的に1946年の第1回国連総会で国連国際児童緊急基金 (United Nations International Children's Emergency Fund=UNICEF) として設立されました。その後、活動の重点を開発途上国の子どもたちを対象とした社会開発に移し、国連児童基金 (United Nations Children's Fund) と改称されましたが、UNICEFの略称は、現在まで引き継がれています。

ユニセフは子どもの権利を擁護する主要な団体であり、2006年現在、156の国と地域で子どもたちの生存と健やかな発達を守るため、保健、栄養、水と衛生、教育などの支援事業をその国の政府やNGO、コミュニティと協力しながら実施しています。

また世界の紛争、自然災害の被災者への支援もいち早く対応できるよう様々な活動をしています。今年に入ってから5月にインドネシアのジャワ島を襲った大地震の被災者へは、発生後48時間以内に衛生キットやテント等を含む緊急支援物資を現地に届けており、紛争で被害を受けたレバノンでは学校の復興を支援しています。



▲安全な水の確保の必要性 ©UNICEF

ユニセフは1965年にノーベル平和賞を受賞しています。

UNICEF活動に協力するために ～募金活動～



▲子どもにふさわしい環境を作る ©UNICEF

日本も1949年～1964年までの15年間、当時の金額で約65億円のUNICEFの援助を受けていました。1956年11月20日「世界子どもの日」をきっかけにユニセフ協力募金(学校募金)が始まり、2005年は、約16,000校がこの活動に参加し、1年間に約4億6千万円もの寄付をしています。



▲緊急事態での教育の復興 ©UNICEF

募金はどのように役立てられています (一部抜粋)

- 📖 女子教育：109円→子ども3人分の鉛筆とノート
- 💉 予防接種プラス：13円→ポリオ経口ワクチン1回分
- ★「プラス」とはビタミンA錠剤の補給など数小栄養素の補給を意味しています。
- 🍼 乳幼児期：7円→急性の下痢による脱水症から子どもの命を守る経口補水塩1袋。安全な水に混ぜて使用する。
- 👤 HIV/エイズ：109円→HIV/エイズ簡易診断キット
- 🧣 緊急事態における子どもの保護：327円→子どもを寒さから守る大きめのウール製毛布1枚

<協力方法>

1. 郵便振替、クレジットカードによる募金
2. ホームページから募金
3. カードとギフト
(定価の約50%が現地の活動資金)
4. マンスリーサポート
5. ユニセフ外国コイン募金

その他、様々な形で協力ができます。
詳細は(財)日本ユニセフ協会までお問い合わせください。
ユニセフ募金:0120-88-1052
(9:00-18:00/土日祝休)
URL: <http://www.unicef.or.jp>

* (財)日本ユニセフ協会への募金の75%以上がユニセフへ送金され、各種事業に役立てられています。



「世界青年の船」事後活動組織(SWYAA) インターナショナル・リユニオン参加者募集!



SWYAA International Reunion in Suva, Fijiが第19回「世界青年の船」事業におけるフィジーの寄港日程に合わせて行われます。

日程：平成19年2月18日(日)～2月22日(木) (4泊5日)

開催地：フィジー(スバ)

参加費：¥44,000 (US\$350相当分 ※換金・送金手数料、事前・事後事務経費含む)

(参加費には、4泊5日の宿泊費、食費、現地移動費が含まれます ※一部自己負担の場合があります。航空券代は含まれていません)

SWYAA International Reunionは、IYEOとSWYAA Fijiが共催で実施する事後活動組織における公式プログラムです。このリユニオンでは、第19回「世界青年の船」事業参加青年との交流や、「にっぽん丸」船上での宿泊(1泊のみ)、船上で行われる公式レセプションへの出席、リユニオン参加青年による今後のネットワークについてのディスカッション、フィジーにおける社会貢献活動などが予定されています。また、船上以外の楽しく有意義なプログラムもフィジーの事後活動組織によって準備されています。

【申込み方法】

参加を希望される方は、日本青年国際交流機構(IYEO)ホームページwww.iyeo.or.jp、または「世界青年の船」事後活動組織ホームページwww.swyaa.orgから申し込み用紙をダウンロードしてお送りください。または、事務局へ直接お問い合わせいただければ、申し込み用紙をお送りします。

※日本からの参加者については、IYEO事務局が書類や参加費のとりまとめを行いますので、必ず事務局へご連絡ください。

【締 切】 12月15日(金) ※申し込み用紙必着

【IYEO事務局】

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-35-14

東京海苔会館6階

日本青年国際交流機構(IYEO)

SWYAAインターナショナル・リユニオン

担当:田中佐代子・齋藤珠恵

swyreunion@iyeo.or.jp

☆御質問等がある方は、お気軽にお問い合わせください。

皆様の応募をお待ちしています。

リユニオン スケジュール

平成19年

2月18日(日) 参加青年スバに到着・オリエンテーション

2月19日(月) にっぽん丸(第19回「世界青年の船」事業参加青年)出迎え

歓迎マーチ、国会見学、船上レセプション

2月20日(火) 社会貢献活動、リユニオン参加者による船上プログラム、にっぽん丸宿泊

2月21日(水) 村訪問

2月22日(木) フェアウェルランチ、帰国

※スケジュールは変更される場合があります。





Global Photo Contest 2006 開催



Global Photo Projectは、2004年3月に内閣府主催で実施された「世界青年の船」事業「既参加青年東京連絡会議」にて、日本青年国際交流機構(IYEO)と世界10か国からの代表者によるプロジェクト案「芸術イベント」を、日本の会議実行委員を中心とするSWYAA Art Project Teamが具体化させたものです。2004年には第1回、2005年には第2回Global Photo Contestが実施され、「既参加青年東京連絡会議」では、事後活動の活性化を促進するプロジェクトとしてGlobal Photo Contestの継続について毎年議題に上げられています。

このプロジェクトは日本青年国際交流機構(IYEO)が取りまとめ、海外への広報及び写真集約については、「世界青年の船」事後活動組織(The Ship for World Youth Alumni Association, SWYAA)が協力。第3回は「Smile & Laughter(笑顔と笑い)」をテーマとした写真を世界中から集め、投票し、最終的に30点の写真を選定します。選ばれた写真をパネルにし、Global Photoパネルとして日本全国・世界各国で展示会や説明会を行います。

第1回・第2回のコンテストの入賞作品は、すでに世界各国、日本各地から貸し出し依頼があり、展示されています。皆様のご応募をお待ちしています!

主催 日本青年国際交流機構(IYEO)
主管 グローバル・フォト・コンテスト事務局
後援 (財)青少年国際交流推進センター

応募資格 日本青年国際交流機構会員
応募テーマ 「Smile & Laughter(笑顔と笑い)」
 ※皆様オリジナルの素敵な写真をお待ちしています。

応募方法

- 応募の際には、所定の申込書に必要事項をご記入の上、作品とともに、2007年1月15日(月)(当日消印有効)までにIYEO事務局まで郵送、またはメールでお送りください。申込用紙はIYEO事務局から取り寄せていただくか(FAXまたは郵送いたします)、ホームページ(<http://www.iyeo.or.jp/swyaa/photo/>)からダウンロードしてください。
- 応募はお一人2点までです。未発表のものに限ります。写真1点につき応募用紙1枚をご使用ください。入賞の有無にかかわらず、応募作品は返却しません。
- デジタル画像は、入賞作品を展示可能なサイズに拡大する都合上、画素数300万画素以上のデジタルカメラを使用し、ファインモード以上で撮影された作品に限ります。
- カラープリントL判サイズ。カラーネガ、カラースライドともに紙焼きにしてご応募ください。



スケジュール

2006年10月	応募受付開始	2007年4月下旬	結果発表(ホームページ)
2007年1月15日	応募締め切り	2007年5月	マクロコズム誌上にて結果発表
2007年2月~3月末	電子投票(ホームページ)	2007年6月	第3弾Global Photoパネル完成
2007年4月初旬	公開投票ならびに電子投票/集計		※日本各地・世界各国貸し出し開始、展示会実施



【お申し込み先】 〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-35-14 東京海苔会館6階

日本青年国際交流機構(IYEO)事務局 グローバル・フォト・プロジェクト・チーム Globalphoto2006@yahoo.co.jp

今月号の表紙

Oh, My, Banana! (ベトナム ホーチミンにて)
 Ronaldo Rada (SSEAYP 28, Philippines)

昔からの方法でバナナを売っている女性。バナナの入った2つのかごをうまくバランスをとりながら肩にかけている。テンポの速い大都市で、新しいものと古いものがうまく混ざり合っている。



編集後記

「ターニングポイント第2巻」を準備中! 全国大会香川大会(12月2~3日)で頒布する予定です。どうぞお楽しみに。(ふ)

MACROCOSM 11月号 Vol.73

2006年11月1日発行(隔月発行)
 編集 マクロコズム編集委員会
 発行 財団法人 青少年国際交流推進センター
 〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町 2-35-14 東京海苔会館6階
 TEL:03-3249-0767 FAX:03-3639-2436
 e-mail: macrocosm@iyeo.or.jp
 URL: <http://www.centerye.org> (CENTERYE)
<http://www.iyeo.or.jp> (IYEO)
 編集協力 内閣府政策統括官(共生社会政策担当)
 日本青年国際交流機構(IYEO)
 定価 220円(本体210円)
 印刷所 株式会社 長正社 TEL:03-3531-1369 FAX:03-3531-3235

since
1884
Pioneer Of
Cruise



「クルーズイヤー2006」
の公式スポンサーとして
クルーズを盛り上げる
イベント・キャンペーン
に協賛しています。



にっぽん丸



焼き立ての美味しいパンを、
船旅の思い出にしてください。

にっぽん丸 ベーカリー 内田孝治

夜も明けきらぬ午前5時。内田孝治は誰よりも早くギャレーに出て、その日の仕事にとりかかる。彼こそ評判高いにっぽん丸のパンの味を支える誇り高きベーカリーだ。誰もが認めるにっぽん丸のパンの美味しさ。その秘密はなんといっても“焼き立て”にある。バケットしかり、ロールパンしかり、お客さまが朝から口にするパンはすべて、その日の朝に焼き上げる。これぞまさしく“美味し船・にっぽん丸”に相応しい、味に対するこだわりなのである。「今は朝食だけで20種類くらいのバリエーションがあるんじゃないでしょうか…」とサラリと言う彼だが、限られた時間はわずか、約2時間。これでは辛い…「いえいえ、大変だなんて思いませんよ。にっぽん丸のパンは美味しい！そんな評判が聞こえてくるのは何より嬉しいし、ボクらの存在がお客さまに喜んでいただけるのは、美味しいパンと、デザートづくり。これしかないのですから…」と話す内田。「味ももてなし」とはまさしくこのこと。パンを焼き続けて12年、そんな内田のつくるパンを頼張り、ダイニングには今日も笑顔が生まれている。

もてなしにも、品質があります。にっぽん丸の船旅

<p>名湯と味覚 雲仙・下関・神戸クルーズ</p> <p>東京→雲仙小浜→下関→神戸→東京 2006年12月6日(水)～12月12日(火) 180,000円</p>	<p>新春の九州・瀬戸内海クルーズ 神戸発着</p> <p>神戸→別府→博多→広島→神戸 2007年1月7日(日)～1月11日(木) 165,000円</p>	<p>oasis にっぽん丸</p> <p>横浜→(伊豆諸島周遊)→横浜 2007年3月9日(金)～3月11日(日) 98,800円</p>
<p>春の松山・屋久島クルーズ 博多発着</p> <p>博多→松山→屋久島→博多 2007年3月21日(水・祝)～3月24日(土) 120,000円</p>	<p>南洋の楽園クルーズ 横浜発着37日間</p> <p>フィジー、タヒチ、ハワイなど太平洋の8つの島々を探訪 2007年5月9日(水)～6月14日(木) 980,000円</p>	<p>2008年世界一周クルーズ 横浜・神戸発着</p> <p>横浜・神戸発着(各101日間) 海外17カ国24港 2008年4月7日(月)～7月17日(木) 2,980,000円</p>

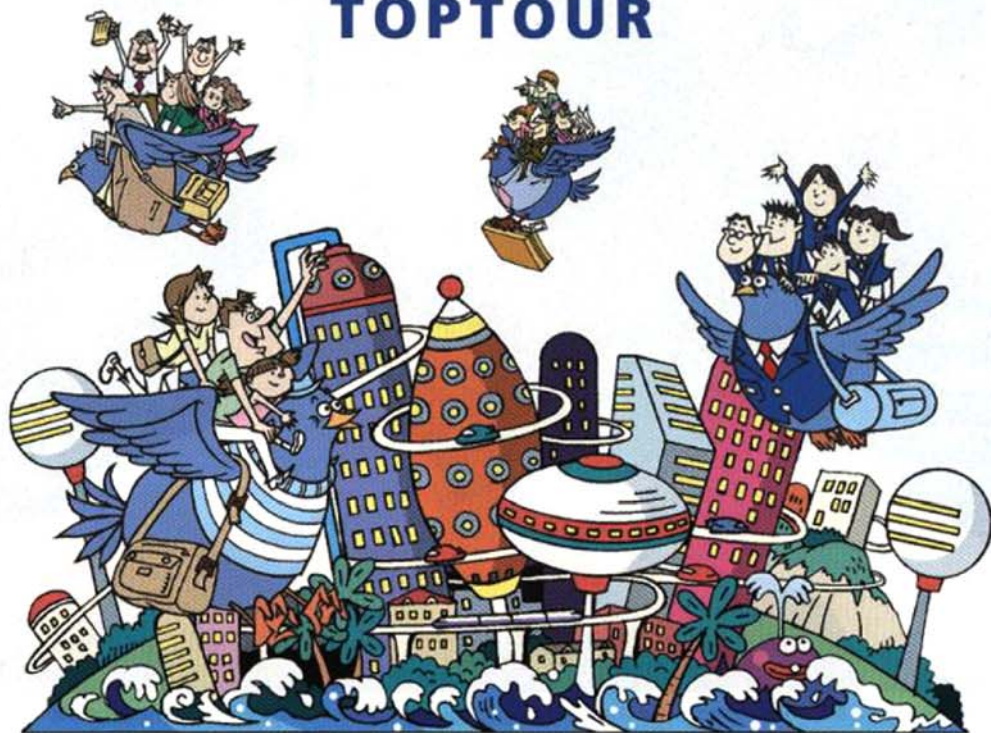
そのほかのクルーズもご用意しております。表示の代金はステートルームC1室を2名でご利用の場合の大人お一人様・国内クルーズは消費税込の旅行代金です。*:各種のコースがございます。


商船三井客船 〒107-8532 東京都港区赤坂1-9-13 三倉ビル5F MOPASは商船三井客船の愛称です。
 お問い合わせは、各クルーズ取扱株式会社 またはMOPASクルーズデスクへ。
クルーズデスクフリーダイヤル ☎0120-791-211
http://www.mopas.co.jp

The 50th Anniversary



TOPTOUR



東急観光株式会社は創立50周年を機にトップツアー株式会社として生まれ変わりました。

旅は人と人とのコミュニケーションの架け橋

旅は人と自然が触れ合う地球の扉

旅は人と歴史をつなぐ時空間のトンネル

そんな旅を創造し、提案する[旅行インテリジェンス企業]

それがトップツアー株式会社

東急観光は50年にわたる第一幕からトップツアーとして新たな第二幕のステージに立ちました。

みなさまから愛される企業をめざして……

人が行き、人が集う、それが旅。

マクロコスモス 2006年11月号

通巻七三三号隔月発行

定価三二〇円(本体二二〇円)

編集協力

内閣府政策統括官
(共生社会政策担当)
日本青年国際交流機構



東急観光が社名を変えました。

トップツアー株式会社

国土交通大臣登録旅行業第38号 ©日本旅行業協会正会員・ボンド保証会員
〒153-8550 東京都目黒区東山3丁目8番1号 <http://www.toptour.co.jp> <http://toptour.jp>